

カトリック 徳山教会

はじめに

徳山教会に赴任して5年目に入りました。昨年度は納骨堂の建設という大きな仕事がありました。今年度は、新型コロナウイルスの影響もあり活動が抑えられる1年になります。このことは一人一人が信仰の歩みを振り返り、これからのビジョンを見つけるにはいい機会となるようにも思います。「個人として、教会共同体としてこれから何ができるのか？」黙想しながら1年を過ごせたらと考えています。月ごとにテーマを設けましたので、それに沿って信仰の歩みを振り返ってみましょう。振り返った信仰体験の分かち合える機会を作れたら、とも考えています。

今年度の終わりに

「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」
(ルカ 22：28 j というイエス様の慰め深い、お褒めの言葉が聴けるように歩いていきましょう。

主任司祭 柴田 潔

6月 あなたにとって「福音」とは何ですか？

どのようにしたら「福音」を伝えることができるでしょうか。「福音」とはギリシア語で「エヴァンゲリオン」。英語で「Good News」(マルコ 1：14)、つまり「よき知らせ」です。

はじめに、私にとっての「福音」「よき知らせ」についてお話しします。私は、イエズス会に入るまで12年間、プレハブ住宅の営業マンをしていました。業績を上げるために日夜頭と体を使いましたが、それと同じくらいに大切なことは契約いただいた方に喜んでもらうことです。つまり顧客満足です。マイホームを建てる上で個々のお客様が大切にしている点を掴んで、それを上回るように準備をすることです。目指していることを感じ取るお客様もおられました。「柴田さんの働き方には、宗教性がありますね。」もちろん、自分一人が頑張っても顧客満足には至りません。会社の同僚、現場の職人さんと協働しながら満足まで引き上げていく。そこに目標を置いていました。カトリック信徒としての使命と醍醐味は、そのようなところにあると思います。それぞれが家族も含めて社会と接点を持っていて、そこに喜びをもたらしていく。カトリックが少数の日本では、会社などの組織の中で宗教性を感じてもらえるように働くことがわかりやすい宣教だと思います。

もう1つは、休日していた身障者の入浴介助のボランティアです。就職して4年目、仕事にも慣れてきたので社会一般に役立つことをしようとボランティア先を探しました。区役所などにも問い合わせましたが、なかなか見つかりません。ふと立ち寄った南山教会で「レジオ・マリエ 祈

りと奉仕の集い」というポスターを見かけ問い合わせました。当時、レジオ・マリエの指導司祭だった飯野耕太郎神父さんと二人で聖霊病院に向かい、川島昇さんという筋ジストロフィーの方の入浴の介助をさせていただきました。その時は二人でしたが、終わってみて「これから一人できるだろうか？」と不安もありました。でも、自分が行けないと入浴が週に1度だけになってしまうようなので決心しました。休みの日、朝から病室(聖霊病院・後に一般病院)に行き、車椅子にお乗せして浴室もしくは銭湯に向かう。服を脱がせて、体を洗い、湯船につかり、汗が引くのを待って新しい服を着せて、車椅子に乗せて病室に戻る。前晩、仕事で遅くなると、抱きかかえた瞬間、体がふわっとすることもありました。ひやっとすることもありますが、嬉しいこともありました。湯船につかっている時は、身障者と健常者の垣根が取り払われていること。満足そうに車椅子に座る、川島さんの表情を見て「ああ、今日も来れてよかったな」と感じました。また、抱きかかえながらだとドアを開けるのに苦労していた銭湯で、不意にドアが開きました。「自動ドアになったのかな？」と思ったら「親孝行な息子さんだね」と刺青が入ったお兄さんがドアを開けてくれたこともありました。(1990年の話) ここまでは「奉仕」の話でしたが、これからは「祈り」の話です。はじめの頃は、レジオ マリエの集いは、同じことの繰り返しで退屈に感じ、足が遠のきました。でも、ある時、妹の結婚問題(お相手の弟さんに介助が必要なので家族が反対していました)のことを告げると、みなさんが真剣にお祈りをしてくれました。困難を乗り越えて妹はめでたく結婚することになり、その時「祈りには力がある」と実感しました。以来、車の運転しながらロザリオの祈りをするようになりました。「マリア様の心で奉仕したい」それが、私の生きる目標になっていきました。ボランティアの話は、お客様にはあまりしていませんでしたが、とてもお世話になっている方から休日の過ごし方を聞かれ答えました。すると「ボランティアもいいけど、柴田くんが今一番したいことをしてね。私は、弟が交通事故に遭いその付き添いでやりたいことを我慢したから」とおっしゃいました。ボランティアは月に1～2回の頻度でしたが、何年か続けるうちに、生活の一部になりました。営業の競争社会と無償の奉仕を行ったり来たりしているうちに、司祭への召し出しの道が開けたように思います。

2010年に司祭叙階されましたが、東日本大震災などの災害ボランティアにエネルギーを注げるのも、本職の仕事(住宅営業)をしながら休日に奉仕をしていたことが基礎にあります。顧客満足もボランティアも、側から見てわかる、役に立つ・喜んでもらえることで「福音」「よき知らせ」を伝えようとしてきました。

「行ってあなたも同じようにしなさい」(ルカ 10:25～37の善きサマリア人のたとえ) 「あなたは、病気の時に見舞ってくれた。」(マタイ 25:34～36)

振り返りの質問

・「よき知らせ」という言葉から、あなたは何が思い浮かびますか？

・どのように「よき知らせ」を伝えてきたでしょうか？